



series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十九章

transfiguration

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

39・transfiguration

361.

362.

363.

364.

365.

366.

367.

368.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チームの医師
ヘルガ	〃
シパド	
ベネトナシュ	

39・transfiguration

この作品は隅々までフィクションです！

361.

「この地の北西に、巨大な地下施設があるだろう。欧洲素粒子物理学研究機構、とかいう」

皆は顔を見合せた。

「北西？」

「巨大な地下施設？」

「——セルンのこと？」

「なんだそれ」

「スイスとフランスの国境をまたいで、大規模な研究施設が地下に設置されてるという……ばかりでかい加速器を使って素粒子や原子核の動きを研究してるんだ」

「……ぞっとしないな」

「それ、稼働を停止するとかしないとかって、最近ニュースでやってなかつたか？」

考えついたことを口々に披露しあって、皆の目はいっせいにシパドを見た。

「それだ」、とシパド。「あたしが、壊した」

「「「なぜ！？」」」

「……公的資金を投じ、科学技術を使って、合法的に、冥界と繋げる計画があったからだ」

「科学技術で？　冥界と繋げる？　そんなことができるのか？」

「科学という言葉を使った、大掛かりな黒魔術だ」

シパドはふっと笑った。

「大掛かりな魔術に科学という言葉が使われてる、ということもできるな」

「質問させてください！」、と険しい表情で進み出たのはヘルガである。

「その、欧洲素粒子物理学研究機構には世界のほとんどの国が関わっていたはず。それらの国々は、機構のそのような目的を……」

気持ちを高ぶらせて質問しているうちに彼女は気がついて、「知っていたわけが……ありませんわね……」しだいに勢いを失くした。

「この世界は科学技術と魔術を相容れないものと考える。いや、魔術などというものは常識的にあり得ないとする。嘲笑の対象にさえなる。おおかたの人間はそういう枠組みで考えるだろう。そうしておけば、科学技術を使って黒魔術を行ったところで、誰も疑問に思わないだろうから」

「——もしや、欧洲素粒子……物理学研究——」

「略語はセルン(Conseil European pour la Recherche Nucleaire の頭文字)」、とレル・ヴァリス。

「セルンが絡んだ計画のほかにも、似たようなのがあるということ！？」

「もちろん。数えきれないほど」

「———」

「科学技術を神のように崇めているこの世界の人間にとって、セルン計画のまことの目的など理解し難いものだ。なにしろ莫大な公金が投入され、国家レベルで後押しされていたのだから」

「さつき、『冥界と繋げる』、と言ったな、セルンの活動とは、冥界主導だったというのか！？」
健の声は異様に低かった。見返してくるシパドの目は異次元の金色。

「そうだ、ともいえる。違う、ともいえる」

「どういう意味だ！」

「今の冥界はかつての冥界ではない。主人が変わった。新しい主人を、そなたは知らないようでも知っている」

「頼むから！！ わかるように言ってくれないか！！」

エドミールはひやひやして様子を見ている。シパドがこれだけ煽られて黙っているわけがない。いずれちよん切れて爆発する。なんだかんだ言っても彼女はそういう女だという実感を持っているエドミールである。

それにしても、桧山健はなんという恐いもの知らずなんだ——

ところがシパドはいたって冷静だった。「ゼウス、サタン、バアル、エンリル、ピドコゾックス……いずれも新主人が持つ名前だ」

聞いたことのある名前、聞いたこともない名前が一度に並べられて、健は言葉を失う。「新主人とは……幾人もいる？？」と、かろうじて尋ねると、シパドは頭を振った。

「違う違う。それらは同一の存在だ。人間の異なる文化が、異なる名前で呼んだのだ」

「ケン、ボクが替わろう」

隣に並んだのは、古代オリエントマニアのレル・ヴァリスである。

363.

神を自称する者が、メソアメリカの冥界に入りこんだのだとシパドは言った。そのころのメソアメリカ地上は人身御供全盛の時代だった。神に人間の血を捧げる、あの遠い時代の儀式が、もはや形だけのものとなって日常的に繰り広げられていた。

『血の犠牲』が新たな神の興味を引いた。

「人間の歴史を振り返れば、古代オリエントと古代メソアメリカ、それぞれまったく性質の異なる土壤の上にあったのは一目瞭然。言うまでもないが、人間が崇拜した神々の性質の違いによるものだ」とシパドは言う。

「地球上を大洪水が襲った時代がある。洋の東西を問わず、歴史的大災害だった。土地も人も流され、人間の生命エネルギーを必要としていた神々にとっても……それを神と呼ぶかどうかは別として……深刻な時代だった。

*

そこで、古代オリエントを代表する神をエンリル、古代メソアメリカをミクトラン、代表する神をテクトリとしておこう。

*

混乱するミクトランにエンリルが浸入した。

"エンリルの遣り口"という言葉がある。多くの文明、そなたらも知っている大国でさえ、これにやられた。親切な貌をして近づき、必要なら手を貸そう、という。選択権を相手に持たせるのだ。相手が援助を要請すると様々な条件を持ち出す。相手にとって損はないと思われるものばかりだ。相手は尊重されていると思い込み、安心する。だが、気がついた時には完全に逃げ場がなくなっている、というものだ」

「またまた～見てきたようなことを～」とベネットナッシュ。

「違うというのか」

「違わない。その通りだよ。その場で見てたみたいじゃないの」

「だから。彼らの遣り方にはパターンがあるのだ。テクトリは『助けてくれ』とエンリルに泣きついで、あげく、ミクトランを乗っ取られたというわけだ」

「大当たり～」

364.

レル・ヴァリスはシパドとベネットナッシュの会話に割り込もうとし、健に止められた。

「おい」とまたもや低い声で、「ベネトナシュ、おまえはイリチヤをさらおうとした。おまえの主人が五体満足なイリチヤを欲していると言ったのをオレは覚えているぞ。だからおまえは彼の千切れた片腕を届けに来たんだった。おまえには主人がいた。それは誰だ」

ベネトナシュは歪んだ笑顔を健に向けた。「え——テクトリさま」

「では、テクトリの上にいるのは誰だ」

「め、冥界王さま」

「ベネトナシュよ、貴様、たった今シパドとなんの話をしてたんだ。テクトリはエンリルに『助けてくれ』と泣きついて、あげく、ミクトランを乗っ取られた、貴様は、その通りだと言った！！」

「う」

「貴様はたった今交わした会話をさえ覚えていられないようだ。テクトリもとんだ部下を持ったものだ。気の毒に」

ベネトナシュはなにか反論しようと思ったものか、いったんうつむいて、顔をあげた。その時に目が合ったのが——ユミコだった。

とたんに、ベネトナシュは硬直した。硬直しつつ、仮面の下で口をぱくぱくさせているのが目に見えるようなうろたえぶり。

「お、おおおお奥方さま？？」

瞬時に、ユミコは理解した。mitsuhaiには遠い過去、一度だけ、子どもを産んだ経験がある。子どもの父親は、あの男。あまりにも遠くて、夢か幻のように霞がかっているものの、このベネトナシュという妖怪はそれを知っている。ユミコは、自分の内部でなにかがぐっと身動きし、自分の口が語るのを聴いた。

「ベネトナシュよ、わたくしのことなどを、よくぞ覚えていてくれましたね」

「い、いや、その、へ、へへ——」と這いつくばる。

「つい今しがたの会話さえ覚えていられないというのに。遠い昔のわたくしのことなどを、すぐに思い出してくれた。礼をいいます。ありがとう」

平伏してしまったベネトナシュは顔もあげられずに小刻みに震えている。ユミコは……mitsuhaは……華奢な体つきで、骨格のしっかりしたヘルガなどと較べると見るからに線が細く、植物的な印象がある。そんなユミコに対して、滑稽なほどの怖れようだ。

鏡を使った逃走路から飛び出したとたんに、華奢な女に衝突した。いかにも非力で盾にするには手頃だったから、力まかせにひっつかんで人質にし、異空間に逃げ込もうとしたベネトナシュだった。しかしさかの冥界王の奥方だったとは。さすがの彼も、己の犯した大失態に気がついたのだった。

「ところでベネトナシュよ、わたくしはもうながいこと、冥界王様にお目にかかるつていないです。よかつたら、あのお方の近況を教えてくれないかしら」

板張りのテラスに、ぽた、ぽた、と滴り落ちるものがあつて、黒く染みを作っている、仮面の隙間から落ちてくる汗。その様子を眺め、ユミコは不思議に思うのである。この妖怪とmitsuhaの間に、過去に何かあったわけではない。確執のひとつも思い出せないので。つねに妖怪の方が勝手に怖れている。なぜ？

答えはたぶん、それしかない。良心の呵責。自分で自分のしたことに罪悪感を感じているのだ。死神という名に値しない——小心で正直な妖怪である。

たおやかなユミコと、彼女の前にひれ伏して震えている死神との図は、はた目にも異様な見ものだった。

「ふふ」と低い笑い声。「教えられる、わけがない。そうだろう、ベネトナシュ」そういうシパドをちらりと見やって、ユミコはさらに追及する。

「なのですか？ あなたと冥界王様はとても深く結びついていると思っていたのですが……」
ユミコの声は少しずつ、固くなっている。

「教えてくださいベネトナシュ。冥界王様になにがあったのです？」

「あたしが替わりに話そうか」、ヒシパドは提案する。

「ありがとうシパドさん。でもわたくしは、ベネトナシュの口から聴きたい、そう思うのです」

365.

ベネトナシュは這いつくばった姿勢のまま、シパドとユミコを交互に見上げていた。そしてついになにも言えずにがっくりと肩を落としてしまった。

「——というわけだ。あたしが代弁してかまわないだろうか？」

ユミコは残念そうにベネトナシュを見、やがて不承不承、シパドに向き直って、こっくりとうなづいた。

*

大洪水の後、ミクトランの神々は飢え、地上の人間に贋を要求した。その血の匂いを、はるか東方の神々が嗅ぎつけて飛来した。この東方の神々の勢力を『エンリル』とする。

神々にもいろいろある。『エンリル』は非常に狡猾で、ありていにいってミクトランの神々よりはるかに知能が高い。できるものなら敵にまわしたくない相手だ。彼らは食糧に窮しているミクトランを助けるふりをした。ミクトランの最高神の名のもとに。

彼らはまずミクトランの主要の九神をバラバラにした。要らぬ心配だったが、九神を団結させないためだ。それぞれに別々の権限を持たせて人間を支配させた。

『夜の九神』として知られる彼らを詳しく語ることができる者はいない。なぜなら、操っていたのはよそ者だからだ。

かつての主神・冥界王の命とあって九神は喜んで己の仕事に精をだした。そして、4 Ahau 8 Kumku、あの日がやってくる。ミミズクがテオティワカンに降臨した日だが、さて、何故、ミミズク・テクトリひとりがその栄光を得たのか。

ベネトナシュよ、そなたは黙っていたいようだが、この期に及んでそなたはいかぬ。明かさせてもらうぞ。そなたとテクトリは、冥界王を『売った』のだ。

ざわっと、殺気のような気配が居合わせた人々から立ちのぼった。

テクトリの地上降臨は、その見返りだ。

366.

「仕方がなかったんだ！」

ベネトナシュは叫ぶように言った。「生きるために！ 仕方がなかったんだ！」

「恐れ入る」シパドの声は冷たい。「生き残るために主神を売り渡すとは。おまえはまさに、妖怪だ！！」

「いちどはおまえと手を組んだあたしだが。この一件で完全に愛想がつきた。おまえとテクトリは、血も涙もない、そもそも魂のない、形だけの低俗な生き物だ。神を名乗るなど、とんでもないわ！！」

「いや～、キミに言われたかないんだけど」

「あたしは自ら神だと名乗ったことなどいっぺんもないし、神だと自称する者に興味などなかった。だが……冥界王は違う。冥界王などと呼ばれているが、彼こそ、神と呼ぶに値する。——そうか、おまえたちが彼を歪めてしまったのだ」

「そんなこと言われてもね～、ワタシはテクトリの言う通りにするしかなかった……」

「生きるために？」シパドは冷笑した。

「なんとでも言うがいい。今こそ、あたしが洗いざらい、暴いてやる。

「冥界王は……本当の名を『世界の守護者』というらしいが、エンリルの手に落ち、幽閉されている。幽閉されながら情報を仕入れ、エンリル配下の者たちのなかにご自身の間者を放っておられる」

「セルンのテクノロジーを使い、地上に冥界のエネルギーを呼び込もうというエンリルの計画を、あたしはあの方から知らされた。そして破壊工作の指揮を任せられ、実行した。

エンリルの計画には、この地の巨大な金鉱を奪取することも含まれていた。黄金は彼らの大好物だからな。しかし、そのために送り込んだのが、まさかのベネトナシュだったとは」

「まったくだよ！」

意気消沈していたはずのベネトナシュが性懲りもなく参戦してきた。「ワタシは光り輝くものが大嫌いだっていうのに！」

「断ればよかつたではないか」

「そもそもいかなかつたんだよ……」

口ぶりからすると、なにか美味な見返りがあったのだ。

「金鉱を持ってる大公家の可憐なお姫様を、ワタシのお嫁さんにしていいと……」

「エンリル側とそういう取引があったんだな。残念だったな、ベネトナシュ、そのお姫様には逃げられたんだろう？」

健は何でもないことをいうような気楽な感じで話を振った。

「そう、逃げられたんだ、けど、死ぬ気で逃げるなんてね。ん？ なんでそんなこと知ってるの？」

「その姫君はオレの母親だ」

よくよく、人から恨みやら怒りやらを買うベネトナシュであった。

367.

そして話はまだ続く。シパドが口を開くたび、驚くべきことが語られる。ただ、それらは信じるに値するのか。そういう疑問と懸念はある。

「そなたは証拠という言葉が好きだが、あたしのいうことが真実かどうか、証明するものはない。セルンを壊した証拠などどこを探してもでてこないだろう。信じるも信じないも、好きにするがいい」

だが——冥界王の本当の名が『世界の守護者』であることを知っている者が果たしてどれくらいいるだろうか。そうと知る機会も、資格も、相当限られているはずだ。

「アンベレオ・カレンダーというのをテクトリは持っていた。非常に精密で難解なそのカレンダーを、エンリルは瞬く間に解読してしまった」

「いくつもの周期が一巡する、百年前のその時を、割り出した？」、と健。

「まさしく。百年前、アンベレオ・カレンダーにおいて、アンベレオが滅びたあの日から、太陽暦にして20,800年(7,592,000日)が経った。太陽暦、儀礼暦、金星の会合周期、大熊座流星群の最大周期、四つのすべてが一巡し、新たな周期に入った。

エンリルはそのことに気づいたのだ。

『その時』を狙って様々に地上の人の動きを操作した。ことに、金融市場を」

「1929年10月24日のニューヨーク株式市場の株価大暴落が……操作されたものだというのか……」

「その世界恐慌というのが発端となって金本位制は崩壊、紙幣による管理通貨制度に移行し、現在も継続中。そういう認識でいいのか？
なにしろ——エンリルはゴールド、そしてなにより、数字が好きだ」

シパドは、桧山健を、レル・ヴァリスを、H&Lの財務と医療を、次々と指さす。

「数学的力学的見解、化学、物理学、生物学などはある特定の物の見方にすぎない。ある意味、それらは迷信なのに、この世界の人間は絶対的な真理だと信じ込んでいる。物質的なものが現実のすべてだと信じ込んでいる。テクノロジーやビジネス、経済学や統計学を至上のものと信じ込んでいる」

指さした手のひらを上にし、体の前面でぐいっと握りしめた。少し前のめりのその仕草は力がこもっていて居合わせる者たちをはっとさせた。

「そして、なんだかんだ言いながら男性が上、女性は下、裕福な者は上、貧しい者は下。枠の中、枠の外。あらゆるところに分断がある。どうだ、違うか。違わないだろう。違わないはずだ。なぜなら、それが『エンリル』だからだ」

世界恐慌とポルタアウレアの金鉱の発見が同時期だったことの背後に存在する「何か」を感じながら、それが何なのか誰にもわからなかつた。

健は頭が痺れる感覚を味わう。

あの夏の日。ひろとの仮祝言のあとに訪れた霧ヶ峰。スクナの言葉がさまざまと思い出される。

「……この時代ほど、人間が数字に縛られている時代はない。数字とはすなわち金銭、あるいは相対的な評価であったりする。

人間はもはやそれらの数字の奴隸。数字がなければなにも始まらぬ。この時代に生まれたそなたにはぴんと来ないかもしれないが、物質の肉体を保持するのに必要な衣食住はもとより、学ぶこと働くこと遊ぶこと、生きることのあらゆる面が、数字に縛られる。

人は、それは常識だ、当たり前だというだろう。

だがな、断言できる。こんな時代はかつてなかつた。人間はもっと自由だった。そなたはおそらく不自由な時代を生きている。そのうえ、そのことを知らない」

「誰かが世界を変えてしまったのだ。人間はそいつの奴隸なのだが、そのことを知らない。それどころはそれが当たり前だといい、異を唱えようものなら、それは世の中というものを知らないからだと嗤う始末だ。この世界が何者かに支配されていることに気がついたのは、そなたの曾祖父、桧山正太郎氏だ」

数字に縛られ、請求書を気にし、また、相対的に評価されるという感覚は、今のご時世では当たり前すぎるものだ。スクナは誰かがそういう世界に変えてしまったという。変えてしまった『誰か』がいるらしい。が『誰か』とはいつたい誰なのか。見当もつかない。雲をつかむような話だった。

その答えを、超のつく問題児、超のつく破壊者、超のつくトラブルメーカーだった、この女が知っていた。

ユミコに害をなすに違いない大敵としてシパドをとらえていたから、この二人の取り合わせは実際に奇妙だとエドミールは感じている。

シパドの言葉の端々から、彼女の魂に変化を起こしたのは数々の転生経験と、冥界王＝世界の守護者との出会いによるものらしい。『世界の守護者』の最初にして最愛の妻だったmitsuhalは、肉体を失ったメルノに肉体を提供した女性なのだ。

「それで……、あの方は今どうしてらっしゃるのですか！」

シパドと健の会話が途切れるのを待ち構えていたユミコは、シパドの腕をつかんでいた。それは超高压のエネルギー一体で、素手で触れるなど、とてもではないが不可能なはずだが、ユミコはまったく、平気だった。

「今もそのエンリルとやらに幽閉されているというの？？」

エドミールは、『顔を曇らせるシパド』というのを、初めて見た。

「——そうなのですね——」

あとがき

え～。PUBOOに登録してる作品として…『Salamander in ~』以外のも含めて…今回で通算、百作目となりました。五十作目とか、ほかのキリバンのときは気にもならなかったんですけど、百か～、よく書いたもんだ。その記念すべき百作目の表紙がこのひとつはね。いやいや、これもひとえに読んでくださる皆さまのおかげ。

リアルタイムで反映されるweb上でなら、一発、花火でも打ち上げたいとこです。
そうそう、そのweb。HTMLやWorld Wide Webを構築したのは CERNの技術者だそうです。

2025年12月22日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十九章 transfiguration

2025年12月25日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社